第１部　フォーラム

パネラー

目黒実
九州大学特任教授
子ども館建設の総合プロデューサー

大谷清美
NPO チャイルドケアセンター代表

武末茂喜
町長

コーディネーター

十時裕
福岡県まちづくり専門家

「こども館（仮称）」とは

【十時】 今日は「こども館（仮称）」の基本計画作りを始めるキックオフ・フォーラムです。まず、町長から子ども館の概要を説明してください。

【町長】 少子高齢化と言われていますが、那珂川町は他所に比べて子どもの数が多いのです。だから子育て支援を政策の柱の一つにしています。これまで「子育て支援センターすくすく」が頑張って活動してきました。しかし、それが手狭になったので、子育て支援センターと児童館を合体させた「こども館」という新しい施設を建設しようと思いました。将来は恵子児童館と「こども館（仮称）」が那珂川町の子ども施設になります。

「こども館（仮称）」に思うこと

【十時】 そこで、那珂川町の人々が「こども館（仮称）」と言う施設をどう作るのかを語り合うのがこのキックオフ・フォーラムです。目黒先生は、チルドレンズミュージアム[*2]を建設した経験がおありですが、子ども館についてどうお考えですか。

【目黒】 「こども館（仮称）」作りは行政が流行だからと建設してもうまくいかない。町長の理念、職員の情熱、町民の参加があって初めていいものができる。

町民に愛される「こども館（仮称）」にするためには、最初から作った後のことを考えて、作らなくてはならない。那珂川町は、こうやって一から町民と一緒になって考えようという姿勢が素晴らしいと思う。大切なのは運営体制なので、どうすれば「こども館（仮称）」が実力を発揮できるか、よく考えてほしい。

僕が考える子ども館の基本方針は、学校でも、家庭でもなく、子どもたちのための第3の居場所だ。

【十時】 子育て支援の観点から、大谷さんは「こども館（仮称）」をどう考えますか。

【大谷】 私も目黒先生に同感で、住民参加で「こども館（仮称）」を作っていくのがいいと思います。なぜなら、子育て支援をしてきて一番大事なのは、人と人の関わりだと思っているからです。那珂川町のファミリーサポートセンターに関わっていますが、そこではもう子どもを守るために人がつながり始めています。

【十時】 居場所と人とのつながりが大事だということですね。

【目黒】 日本は居場所と人のつながりを失ってしまった。昔は子ども社会に遊ぶ時間と原っぱや空き地という空間と近所の仲間と言う「三つの間」があった。しかし今は時間も空間もないし、仲間もいなくなった。その結果、子どもの体や心が弱くなった。

それを補完するために僕がやって来たのが『絵本カーニバル』で、子どもに学校や家庭ではない第3の居場所を作り、子どもと共に物語を作る活動だ。ここで言う物語とは、地域の優しさや様々な人の親切を子どもたちと感じ合うことだ。特に老人と子どもは親和性がある。そんなつながりが子どもを支える力になる。

【十時】 大谷さんにとって、支えるとは、何を意味しますか。

【大谷】 子育て支援の観点から言えば、体験です。例えば、お母さんたちへの支援でいえば、今の若いお母さんは情報をたくさん持っているけれど、判断力がない。そこに、地域の子育て経験者が私はこうだったよと体験を語ることで、判断基準ができる。これが支援なんです。

子どもに関して言えば「本を読みなさいではなく」、子どもと一緒に読む体験、一緒に遊ぶ体験が、子どもを支える支援になるんです。

【十時】 町長、居場所をつくるためには、人のつながりが必要だという話を聞いてどう思いますか。

【町長】 社会教育の場として、学校や家庭以外に子どもたちの社会性を磨く第3の居場所が必要だと、改めて思いました。

「こども館（仮称）」を、使う人である子どもや町民の意見をよく聴いて、使いやすい、みんなに愛される「こども館（仮称）」にしたいですね。

「こども館（仮称）」への提案

【十時】 では「こども館（仮称）」が、那珂川町で地域と一体化するために、具体的に何が必要ですか。

【大谷】 私は、「こども館（仮称）」には出会いのワクワク感がほしいと思います。子どもだけでなく、大人も、親も地域も関わって、子どもとみんながわくわくすることを考える。そこに知恵を貸すボランティアや専門家がいて、みんなが力を合わせれば、「こども館（仮称）」が素晴らしい場になると思う。

【目黒】 今、社会から抜け落ちている子どもに仕事の面白さを伝える仕組みだ。それから大人も子どもと一緒になって、子ども性を発揮する場だ。突飛な提案だが、例えば日本馬を飼育するようなプログラムだ。飼育のプロセスを共有して、その間にある苦労や喜びを体感し合う仕組みを作るといと思う。何がやりたいか市民と一緒に考えることが大事。九大の子どもプロジェクトも応援する。

【十時】 目黒先生、大谷さん、貴重な意見や提案をありがとうございました。プロセスやソフトを大事に「こども館（仮称）」を作らなければなりませんね。

対談はここまでですが、この対談を受けて、第2部のワールド・カフェではチーム未来NAKAGAWAとして「こども館（仮称）」に関わる皆さんの意見を聞く場を作りますので、皆さんよろしくお願いします。

＊2：チルドレンズミュージアムは、子どもたちの体験学習を刺激する展示とプログラムを提供する教育施設である。篠山チルドレンズミュージアムは、兵庫県篠山市東部の山間にあった中学校を再活用し、「体験する＝あそぶ」ことの大切さを重視し、昔からの文化・習慣と新しいことへのチャレンジを取り入れた展示やワークショップで一日中あそぶことのできる、子どものためのミュージアムである。

▼目黒実 氏

▼武末茂喜 町長

▲大谷清美 氏

▲十時裕 氏